

年月日：1966年7月30日

用務：人口問題研究についての韓国同研究と本研究との連絡協力について打ち合わせ

連絡機関：韓国経済企画院

- Dr. Polychronopoulon Antonia: Department of Preventive Medicine, University of Athens, Greece

年月日：1966年7月30日

用務：日本における人口問題の調査研究状態の視察

連絡機関：Michigan University, Demographic Center

第18回日本人口学会大会

第18回日本人口学会総会ならびに研究発表会は、昭和41年5月13、14の両日東京・中央大学会館において開催された。今回は、『人口論』の著者マルサスの生誕200年を記念した大会として、一般研究発表とは別に「マルサス関係研究発表」もとくに行なわれた。また、同会館の一室に「マルサス史料展」を設け、19世紀に出版されたものを中心にしたマルサス関係の外国文献約100点、邦文文献約50点が展示された。

なお、総会では任期（2か年）満了による役員の変更が行なわれ、次期の役員として下記の諸氏が選出された。

(ABC順)

会長	永井 亨	(財団法人人口問題研究会理事長)
常務理事	水島 治夫	(九州大学名誉教授)
	森田 優三	(青山学院大学教授)
	南 亮三郎	(駒沢大学教授)
	館 稔	(人口問題研究所長)
	寺尾 琢磨	(慶応義塾大学教授)
理事	古屋 芳雄	(日本家族計画連盟会長)
	小山 栄三	(立教大学講師)
	岡崎 文規	(竜谷大学教授)
	篠崎 信男	(人口問題研究所人口資質部長)
	曾田 長宗	(国立公衆衛生院長)
	上田 正夫	(人口問題研究所人口移動部長)
監事	黒田 俊夫	(人口問題研究所人口移動部移動科長)
	三原 信一	(東洋大学教授)

研究発表会において行なわれた報告題名および報告者を掲げると次のごとくである。

第1日（5月13日）

○一般研究発表

- 1 日本のモデル生命表—— q_x パターンの探究——……………安川 正彬（慶応義塾大学）
- 2 日本縄文時代人の死亡年齢……………小林 和正（人口問題研究所）
- 3 生存競争の数学的理論の社会・経済現象への応用……………吉原 友吉（東京水産大学）
- 4 労働力人口の就業形態について……………岡崎 陽一（人口問題研究所）
- 5 在日朝鮮人の人口……………水島 治夫（九州大学）
- 6 都道府県別所得と人口移動……………館 稔（人口問題研究所）
伊藤 秋子（お茶の水女子大学）

○マルサス関係研究発表

- 1 マルサスにおける穀物賃金と福祉……………水野 朝夫（中央大学）

- 2 マルサスにおける生活標準の観念……………大淵 寛 (中央大学)
- 3 マルサスの寿命説について……………安倍 弘毅 (久留米大学)
- 4 後進国の人口波動と人口の経済構造変動……………石 南国 (函館大学)
- 5 マッケンロートのマルサス批判……………皆川 勇一 (人口問題研究所)
- 6 現代におけるマルサス……………吉田 忠雄 (明治大学)

第2日 (5月14日)

○一般研究発表

- 7 人口移動の一般理論について……………兼清 弘之 (亜細亜大学)
- 8 Zipf の順位法則の成立機構……………鈴木 啓祐 (流通経済大学)
- 9 都市化と大都市人口の構造分化—大阪市の人口動態を中心にして—東田 敏夫 (関西医科大学)
日比 健 (”)
- 10 出生力解析の方法論の発展……………木村 正文 (国立公衆衛生院)
- 11 出生力に及ぼす社会・心理的要因：実地調査の概要……………河野 稠果 (人口問題研究所)
- 12 社会移動と出生行動……………安田 三郎 (東京教育大学)

○マルサス関係特別講演「マルサスの旧地をたずねて」……………南 亮三郎 (駒沢大学)

○シンポジウム「マルサスと現代」……………座長・南 亮三郎 (駒沢大学)

- (1) デモグラフィの立場から……………黒田 俊夫 (人口問題研究所)
- (2) 経済学の立場から……………寺尾 琢磨 (慶応義塾大学)
- (3) 後進国の問題点から……………板垣 與一 (一橋大学)

日本都市学会第13回大会

昭和41年5月28(土)、29(日)の2日間にわたって、日本都市学会第13回大会が松本市において開催された。本研究所から、上田正夫(人口移動部長)、黒田俊夫(人口移動部移動科長)、内野澄子(人口移動部移動科)の3技官が参加し、研究報告を行なった。なお、岡崎陽一技官(人口政策部主任研究官)も研究報告を行なう予定であったが、実地調査の出張と重なり欠席した。

自由課題は16題で、5月28日の午前、3部会に分けての報告が行なわれた。本研究所からの参加者の報告題目は次のとおりである。

上田正夫：大都市人口の変動要因に関する研究

黒田俊夫・内野澄子：大都市圏革命と地域開発——人口の居住空間立地の動向からみた分析——

岡崎陽一：労働移動からみた都市地域の機能(欠席)

共通課題として、「都市学の成立」と「新産業都市の課題」の研究報告が第1日の午後行なわれた。都市学会各支部から、あらかじめ指名された会員が報告を行ない、活発な討論が行なわれた。

第2日は、松本市役所主催の「松本市および新産都市(松本・諏訪地区)」の視察が行なわれた。

参加者は130名に達したが、美ヶ原温泉ホテルにおける泊り込みの研究報告会はきわめて効果的であった。今回の大会のシンポジウムは上述のように2種あり、時間的に制約があったが、都市の理論的研究と新産都市という現実的課題とを平行的に取り上げたことは、「都市学」に課された宿命的な使命ともいえよう。

都市学会年報として『都市学の成立と課題』が刊行されたことは、都市学会の新しい発展段階を示すものであるとともに、都市学に対する積極的展開に対する意欲の現われとみることができよう。黒田、岡崎両技官は、それぞれ人口学および経済学の観点から都市研究への接近と役割についての論文を年報に寄稿したが、いずれも multi-disciplinary science である人口学と都市学の相互接近も新しい課題であるといえよう。

(黒田俊夫記)